

## 2024年7月21日 久宝教会 聖霊降臨節第10主日礼拝メッセージ

「全ては平和のために」

牛田匡牧師

聖書 ローマの信徒への手紙 14章 13-23節

先週は「部落解放祈りの日礼拝」でした。私たちの日常生活の中には、部落差別だけではなく、性別やセクシャリティによる性差別もありますし、病気や障がいに基づく差別や、学歴や派閥による差別など、まだまだ様々な差別が根深く残っています。いや、むしろインターネットの上などでは、ますます激しくなっている所もあるように感じています。そもそも何故、それぞれの差別が生まれたのでしょうか。それらの理由を考えてみると、歴史的にはその理由は明確には分からないのではないかと思います。

それぞれの起源、始まりの理由はハッキリとはしない代わりに、ハッキリしているのは「差別があった」という事実です。子どもの社会でも大人の社会でも、ほんの些細な、つまらない理由から「いじめ」が始まることがあるように、「差別」も何か明確な理由があって始まるものではなく、いつの間にか気付くと「始まっていた」ものなのではないかと思います。それこそ、自分と他人とを比べて見た時に、自分よりも何か優れている、明確に異なると感じた時に、初めは「尊敬」だったり「畏怖」だったりした感情が、いつしか「恐怖」に変わってしまい、自分の身を守るために相手を差別して排斥・排除したり、抑圧したりするようになったということもあるかもしれません。

聖書の中に何度も何度も繰り返し、「恐れるな」「怖がることはありません」という言葉が記されているのも、裏を返せば大昔から人々は常に恐怖と隣り合わせてあったために、預言者たちを通して神様からの「恐れるな」という語り掛けを聞いて、力付けられて来ていたということなのではないかと思います。それこそ今も戦争が続けられているウクライナやパレスチナの人々は、安心して眠ることすら出来ていないと思いますし、大震災の被災者の方々は何年経っても小さな地震にも恐怖を感じられると言われます。また犯罪被害者の方々や差別の被害者の方々も、心の奥底に刻み付けられた恐怖の体験や記憶は、回復までに非常に長い時間と労力がかかると言われています。恐らく人類はその歴史の始めから、ずっと様々な恐怖と向き合いながら歩み続けて来た。そういう人類の歴史があったのでしょう。

そしてそのような恐怖を克服する模索の歩みは 21 世紀の今もなお続いています。

今回の聖書のお話は、「もう互いに裁き合うのはやめましょう」というパウロの言葉から始まっていますが、この言葉の背景にあったのは、「何は食べて良い」のか、また逆に「何は食べてはいけない」のか、というユダヤ教の食物に関する律法でした。ユダヤ教の律法には、食物規定が細かく定められており、その中で食べても良いとされている清いものと、食べてはならないとされている<sup>けが</sup>汚れているものがありました。そしてそれらの細かい食物規定をきちんと守れている人は「義しい人」と見なされ、守れていない人は「罪人」だと見なされていました。例えばヘブライ語聖書の「レビ記」を見ると、「<sup>はんすう</sup>反芻するかしないか、ひづめが割れているか割れていないか、ヒレやウロコがあるかないか、地上に群がるかどうか」などで、清いか清くないかが記されています(11 章)。食物規定の中には、理由がよく分からないものもありますが、寄生虫や食中毒を防ぐためというような現代科学の観点から説明できそうなものもあります。多くは先人たちの経験に基づいて、危険な食べ物と見なされていたのでしょう。とはいえ、それらの食物規定が、命を守るためという本来の目的を外れ、結果的に「義しい人」と「罪人」を区別し、差別されるために用いられてしまっていました。

しかし、そのような食物規定を守ることができるかできないかは、本人の心がけ次第というだけではなく、その人が置かれている社会的身分や職業、経済状況などの様々な要因も関係していました。そのような中で、イエス様が言われたのは、「外から人に入って、人を<sup>けが</sup>汚すことのできるものは何もなく、人から出て来るものが人を汚すのである」(マルコ 7:15)、つまり「何を食べるか否かで、人が汚れたりするわけじゃない。そんなこと気にしなくていい」ということでした。また「使徒言行録」10 章でも、ペトロの目の前に天から様々な動物たちが入った大きな布のような入れ物が降りて来て、神様から「それらを食べなさい」と言われたものの、ペトロは驚いて「主よ、とんでもないことです、清くない物、汚れた物など食べたことはありません」と答えた。それに対して「神が清めたものを清くないなどと言ってはならない」と言われた、というペトロが見た幻、夢の情景が記されています。このお話からも、ユダヤ教徒であったペトロの常識としても清くない物は食べてはいけない。でも神様の思いは、それらを新たに越えて行ったということが分かります。

パウロの記した手紙に戻ります。14 節でパウロも「私は、主イエスにあって知り、確信しています。それ自体で汚れたものは何一つありません。汚れていると思う人にとってだけ、それは汚れたものになるのです」と言っています。これは「私パウロは、主イエスがそのように言っているのを知っています」という伝聞の表現であり、その内容としては、「それ自体で汚れているものはありません。『それが汚れている』と思う人にとってだけ、それは汚れたものになるのです」ということでした。昔からの律法、ユダヤ教の教えが、人々の命や生活を守るためのものではなく、逆に人々を裁くためのものになってしまっていたら、それは本末転倒ではないか。本当に大切なのは裁くことではないはずだ、ということです。

そのようなイエス様の教えは、当時の人々、とりわけ様々な事情から律法を守ることが出来なかった人々、罪人と見なされていた人々には、大歓迎されました。しかし、その一方で人々の習慣や文化というものは、そう簡単には変わるものでもなく、まだまだ根深く残っていたところもありました。イエス様に従って行くと言った最初期のキリスト教共同体の中にも、やはり食べ物について、「それはいいけど、あれはダメだ」という人々が各地に何人もいたようです。そのためにパウロはこのような手紙を書き送りました。15 節「食べ物のために、きょうだいが心を痛めているなら、あなたはもはや愛に従って歩んではいません。食べ物のことで、きょうだいを滅ぼしてはなりません。(中略)ですから、あなたがたにとって善いことが、そしりの種にならないようにしなさい」。何故なら、17 節ですが、神の国とは「何を飲んだり食べたりして、良いか悪いか」という所にはあるわけではないからです。神の国とは聖霊と共にあって実現する正義と平和と喜びのある所にこそあるものだとパウロは言っています。

ここでパウロが「全てのものが清いだから、何を食べても、何を食べなくても、そんなことは一切関係ありません」と言い切っていれば、それで良かったのですが、そうはせずに、彼は回りくどくあまりハッキリしない形で、文章を書き綴っています。それは、断言するだけでは、当時の教会の人々には伝わらないと考えた末の配慮ということもあったかもしれませんし、またパウロ自身も、かつてそれら律法に定められた食物規定を厳格に守って来ていたから、完全には抜け切れていなかった、という彼自身の背景に由来するものだったのではないかと考えられます。

20 節以降も何だか、ハッキリしないような表現が続きます。「食べ物のために、神の業<sup>わざ</sup>を無にしてはなりません。すべての物は清いのです。しかし、つまずきを自覚しながら食べる者にとっては、悪いのです」……。良いのか、悪いのか、一体どっちなのか分からなくなりますが、「これは汚れているかな、大丈夫かなと、心配しながら食べたら、それは汚れになっちゃうよ」ということなのかと思います。22 節の「自分で良いと認めたことについて、自分を責めないなら幸いです」という言葉も、つまり「自分で疑いを差しはさまないでいられるなら、そこには神様からの力、助けがありますね」ということなのではないでしょうか。

23 節には「罪」と言う言葉が出て来ます。これは、元の言葉の意味からすると、神様の思いから外れている、「道を外れている」と理解すると分かりやすいかと思います。大切なことは、「これは大丈夫かな」とビクビクして、疑ってしまう自分を一旦脇に置いておいて、「何を食べても大丈夫」という神様からの力を受けて歩むこと、そして周りの人たちともお互いに裁き合わないことなのだと思います。「神の国」は食物規定という境界線によって守られた安全圏の中にあるのではなく、聖霊と共にあって実現する正義と平和と喜びのある所にこそ、あるものだからです。

19 節でパウロは「だから、平和に役立つことや、互いを築き上げるのに役立つことを追い求めようではありませんか」と言っています。細かいルールや規定など、それらが作られた時には人々の命と生活を守るため、平和のためという明確な目的があったのだと思いますが、それらの目的がいつの間にか失われ、忘れられてしまい、他人を区別して裁くという役割だけが残っているのであれば、それはもはや平和のために役立っていない、お互いを築き上げるのに役立っていないではないか。全ては平和のために、命のために、という原点に立ち返って考え直す必要がある、ということなのでしょう。

お互いの命を大切にし合い、正義と平和と喜びの神の国を作るために、私たちはここから用いられて行きます。